

第33回 AACA賞

「石川県立図書館」

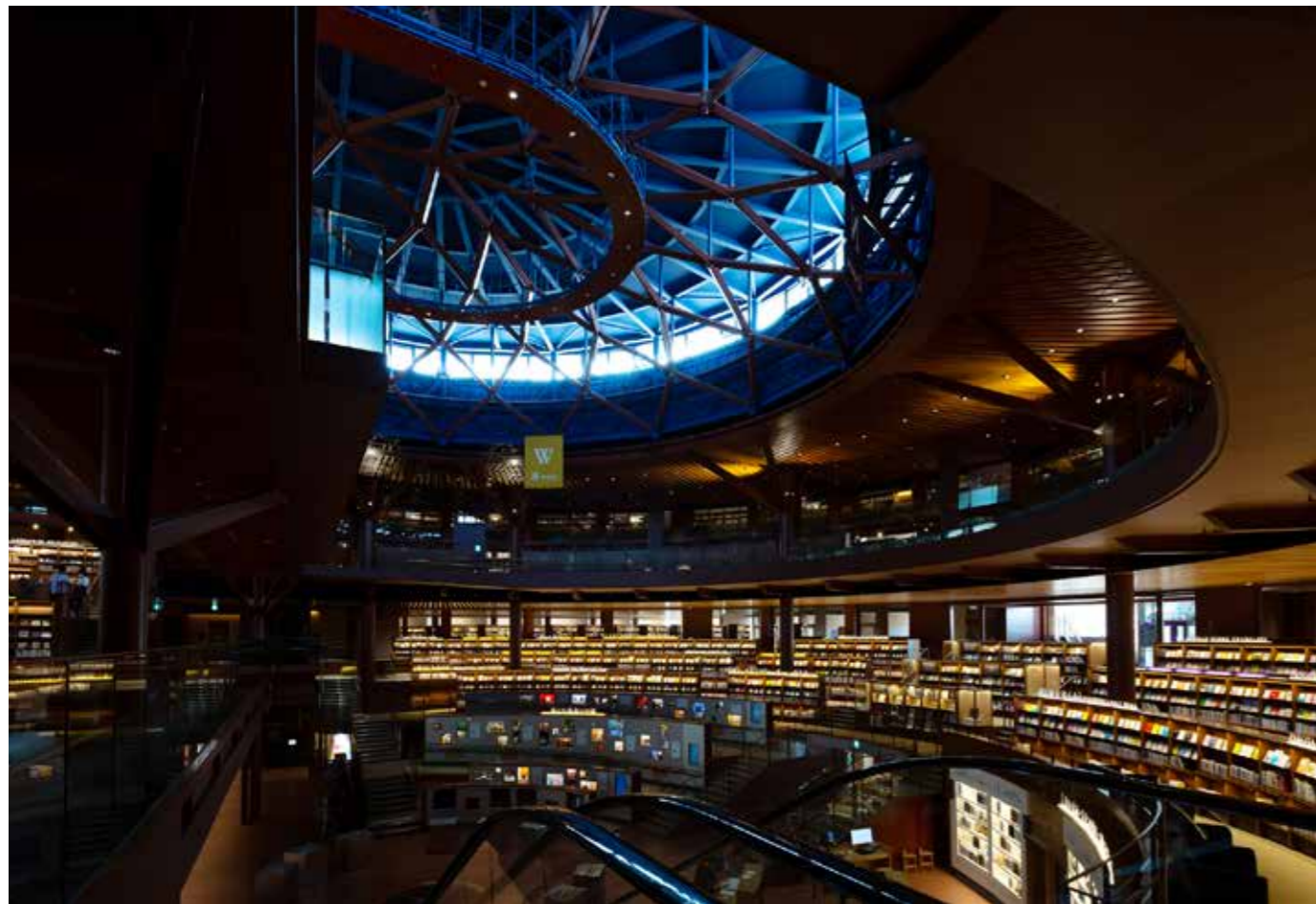
作者: 仙田満 環境デザイン研究所 / 川上元美 川上デザインルーム / 面出薫 ライティングプランナーズ アソシエイツ / 廣村正彰 廣村デザイン事務所 / 柳原博史 マインドスケープ / 水間政典・塩津淳司 トータルメディア開発研究所

ベンガラ色を纏った四角いボリュームが一層分持ち上げられて、ずっと以前からそこにあったかのように金沢らしい趣を見せて建っている。天井高を抑えたエントランス交流エリアを抜けて進むと 眼前にドラマチックな大空間が広がり 誰もが思わず見上げる。大きな円形空間を覆う屋根の鉄骨構造がトップサイドライトに透けて美しく、群青色の天井を軽やかに受けている。大空間を取り巻く階段状の連続層からなる円形の空間だが、応募パネル写真で受けた印象は覆われて、中心に向けての求心性は実際には緩く、穏やかな距離感が心地よい。そして、スロープで上階につながる書架と閲覧デスクが注意深く計画されていることと同時に、ラウンジスペースでもあるブリッジによる向かい合ったD型楕円プランが、求心する一点を無くしたことによるものであり巧みだ。円形に連続する書架と利用者相互の空間感覚を侵さない関係や書架や本の配架、表紙見せの展示などがテーマ分類されて配置され、またエリア表示など利用者をサポートするサインや、さまざまな家具類のカラースキームなどが全て連動して計画されていることが一目瞭然に統率されている。スロープに導かれて新しい本に出会うかもしれない空間体験が心地よく、知らぬ間に上階

に導かれていくと、学生向けの学習スペースや研究者向けのエリアなど大小の居場所が用意されている。随所に設けられた読書の場は、窓辺の居場所に最も特徴が現れている。およそ50席ある窓辺のコーナーは、外光が柔らかく入り、なおかつ書架や美術展示ケースなどによって半個室状のコーナーを生み出し、それぞれに選定された椅子によって、全て違うしつらえの心地よさを提供している。こうした細やかな居場所作りが、建築と家具の密接な連携により実現できていることを窺わせ、大空間でありながら上階に行くに従って静寂の閲覧空間となっていることがはっきりと体感できるのである。また、建築、内装、家具、サイン、美術品展示などの全ての要素が重層して、加賀五彩による彩色計画によりコントロールされて、時節の変化も含めて生きた運用がなされ、明快で落ち着いたある開かれた図書館環境を実現している。

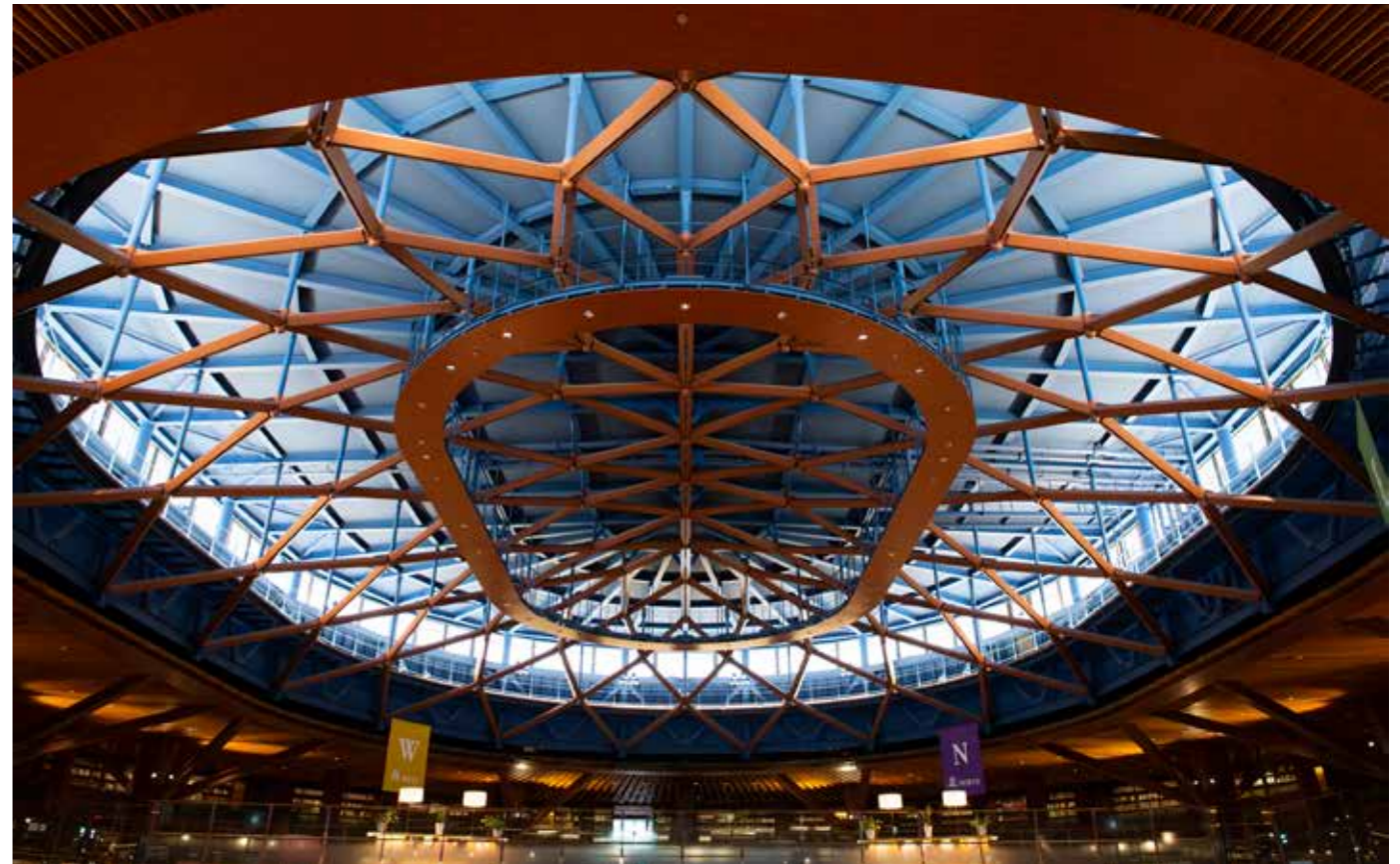
建築、家具、美術工芸が総合的に濃密に統合調和した 新しい時代を象徴する図書館であり、AACA賞にふさわしいと決定しました。

[選考委員: 藤江和子]



トップサイドライトからの柔らかな光に包まれるグレートホールを一望する

写真撮影: 藤塚光政



約40×50mの大空間を支えるラメラドーム

写真撮影: 小寺恵



南東外観。本を“めくる”から着想された、カーテンウォールとタイル張りのPCパネルが雁行

写真撮影: マインドスケープ

金沢市小立野の旧金沢大学工学部跡地に移転建替する、石川県立図書館の計画である。敷地中央に本体建物を配置し、その周辺に広場や庭、回廊、駐車場、緑道を層状に、遊環構造的に計画することで、近隣の住宅街に配慮しつつ良好な図書館環境をつくることを意図した。建物は地下1階地上4階建の構成で、中心部にはグレートホール(以下、GH)と呼ぶ吹き抜けの大閲覧空間をもつ。GHは円形劇場を思わせる段状の空間であり、書架と多様な

閲覧席からなる各段は1階から3階までがスロープによって接続され、遊環構造の原則により集中と回遊を促すように構成されている。これに加えて、EV、ESC、小階段、ブリッジによるショートカット動線も同時に備え、本を散策する楽しみと目的の本へのアクセス性を両立させた。館内には伝統工芸品がGHやエントランス、窓際閲覧席など様々な場所に展示されており、館内をめぐることによって石川県の文化に触れることができる。

[応募番号: 42]
所在地: 石川県金沢市小立野
主要用途: 図書館、集会場
敷地面積: 32,878.21㎡
延床面積: 22,720.81㎡

第33回 AACA賞 芦原義信賞

「Node Kanazawa」

作者:奈良祐希 株式会社 EARTHEN 代表取締役

この計画は、コロナのパンデミックを経験したベンチャー企業が本社のケーススタディーとして始まった、郊外型の新本社計画が実現したものである。

敷地は金沢市の中心から少し離れた、北陸の物流の中継基地である金沢問屋センターの入り口に面し、中心の並木道の始まりの部分に位置している。並木道を引き込むように、敷地中央にクロスするNode「緑のミチ」が設けられ、そこには気持ちの良い自然の風が通り抜け、柔らかな日陰を作り出している。

南北2つに分割されたボリュームは、南側が少し低くすることで、一日の太陽の動きに沿って刻々と変化する気持ちの良い木陰を提供している。そしてこの緑の路地空間に面する1階のシェアゾーンのギャラリー、カフェ、オフィスに心地よい居場所を提供している。このNodeの緑道はパブリックに開放された「抜け道」になっていて、時折屈折したガラス越しに通り過ぎる人々の動きが、カフェやギャラリーにいる人々に心地よいリズムをも

たらしている。

外観の構成は、武家屋敷の土塀や現代の機能的な倉庫を意識し、スケールアウトした土壁、倉庫の大きな庇の様な4mのキャンティレバー、渡り廊下は歴史的な問屋町を構成する建築の要素からインスパイヤーされ、地域の風景に馴染み、歴史や記憶の現代への継承を促しているが、在来木造工法の必要要素としても機能している。

この計画は建築のあるべき創られ方への問いかけを持っていると言える。陶芸家でもある設計者は、陶芸の持つ「感情的」、「土着的」な無意識な土による歪な土の塊のような形態スタディでの検討と、最終的に「使われる建築」という現実化への設計意識を融合させたプロセスでこの計画を実現させている。建築本来が持つ芸術と工学の融合の原点にチャレンジした優れた試みであり、AACA賞芦原義信賞にまさに相応しい作品である。 [選考委員:堀越英嗣]



多角形をなす街区の中を東側県道の榎並木を引き込むように緑道が貫通する



5mキャンティレバーを実現する木造架構と緑のカーテン



土塀を連想させるスケールアウトした土壁と金属、ガラスによる対比が鮮やかな緑道

AACA賞を主催される日本建築美術工芸協会は建築家、美術家、工芸家をはじめ関係する様々な分野の個人や団体が連携協力し、芸術性豊かな環境と美しい景観の創造を目的として、文化向上に寄与する事を願い設立された団体です。私は陶芸創作と建築設計を生業にしており、様々な分野の境界を解すことで従来の価値観を更新させる取り組みをしております。そのような観点から、応募作品「Node Kanazawa」は企業新社屋でありながら、アートギャ

ラリーやカフェ等を内包し、産学協同や様々なアーティストとの協働で立ち上がったプロジェクトですので AACA賞の主旨に相応しいと考えております。

[応募番号:47]
所在地:石川県金沢市問屋町
主要用途:事務所(一部店舗)
敷地面積:456.59㎡
延床面積:473.52㎡

第33回AACAA賞 優秀賞

「八戸市美術館」

作者:株式会社西澤徹夫建築事務所 代表取締役 西澤徹夫 / PRINT AND BUILD株式会社 代表取締役 浅子佳英 / 株式会社interrobang 代表 森純平

八戸市美術館に初めて訪ねた。2021年3月に開館し、すでに2年間の活動もあわせてみる事になる。美術館の基本構想では、美術品の展示や調査研究及び、収集保存といった従来の役割に、さらに「アート学び」「アートのまちづくり」といった2つのテーマをかかげているのが特長となろう。美術館を訪れた人々が互いに刺激し合いながら感性を高め、育まれていく“共育”を担う「アートの学び」を目指す。そして、観光や福祉、地域コミュニティなど様々な分野を横断した総合的な文化政策を担う「アートのまちづくり」つまり美術館には3つの役割を融合する場と考えられてきた。

まず館内に入ると「ジャイアントルーム」に直結する。天井高17メートル広さ800平方メートル。ここはいろんなプロジェクトの考えられる空間だ。イベントごとに動く棚とカーテンで空間をしきり、ミーティングや、ワークショップ等行われている。建物の奥にある「ホワイトキューブ」は企画展示会

場と「コレクションラボ」が続く。さらに市民の発表活動を支える2つのギャラリーと大小のアトリエ、様々な小部屋が続き、部屋から部屋へ繋がっていて、いわば顔のない不思議な建物であった。これは落ち着かないが、面白い。

話は横道に逸れるが、ここ十数年日本の文化政策にいろいろな変化が起きている。美術館といえば、文部科学省、文化庁が管轄と思うが、たとえば国土交通省の「社会資本整備事業」が文化美術施設に交付金を出している。2007年(平成16年)国立国際美術館を皮切りに、札幌市、秋田県秋田市、徳島県と、全国に広がっている。この八戸市もその機会を生かして実現した。市内にはユニークな取り組みとして、まちなか広場「マチニワ」や、「八戸ブックセンター」がある。それらと共に市民の方々に親しまれ、愛され、今後の活動に期待したいと思う。今回は、審査会全員一致でAACAA賞優秀賞を決定いたしました。 [選考委員:米林雄一]



外観:周囲への圧迫感と日影をおさえる凸型ボリュームとキールトラスによるハイサイドライト

写真撮影:阿野太一



ジャイアントルーム:エントランスや展示、レクチャー、イベント、休憩などの活動が共存できる巨大な空間

写真撮影: morinakayasuki



ホワイトキューブ:天井に回路+器具調光の照明と仮設壁を固定可能で、さまざまな要求に対応できる展示室

写真撮影:新建築社

八戸市美術館は、収蔵・展示を主役とした従来型の美術館像から、地域の文化に根ざしたプロジェクト・ラーニングプログラムを主体とした美術館像へのアップデートを目指している。進行中の美術作品や創作活動など、多様な活動が共存し人々が互いに学び合える包容力のある空間が求められた。そこで、誰もが利用でき偶然未知のものに出会える巨大な空間「ジャイアントルーム」と、プロジェクトをより深化させる諸機能に特化した「個室群」という2種類の空

間を併置した。「ジャイアントルーム」はエントランスであり、休憩、制作や展示も可能なスペースで、一方、「個室群」はより具体的に、特定の利用者による制作や展示が可能な個別の仕様になっている。特定の活動に特化しているからこそ返ってそれを裏切ったり、部屋をさまざまに組み合わせたり、といったことができる。抽象的な空間から何かが生まれるのではなく、とても具体的な場が人々を触発していくのだ。

[応募番号:1]

所在地:青森県八戸市大字番町

主要用途:美術館

敷地面積:6,732.14㎡

延床面積:4,844.95㎡

「CORNES HOUSE」

作者:花岡郁哉 株式会社 竹中工務店

この敷地の北側に首都高速がある。その先に芝公園が一望でき、公園の大きな緑の塊の先には麻布・虎ノ門・日比谷のビル群が連立している。敷地の形状はほぼ長方形で低層部に輸入高級車のショールームを配置し、高架の高速道路より高い位置にオフィスフロアを設置している。設計者が「階ごとに変化する周辺環境との関りをデザインする」と表現している通り、各オフィスフロアから最適な周囲の環境を読み解き開口面の位置を設定、その外観は大きなブロックを積層したような変化のある彫刻的なものとなっている。また、ブロック同士がずれることにより、効果的に緑化が施された小ぶりな屋上が形成され、前面道路に沿って建つ周囲のビルの単調な連なりの中で、街並みに変化と潤いを与えている。さらに外装のPC版は、ランダムな太さの縦糸が強調された織物のような表情となっており、縦線の凹凸が作り出す繊細な影が外観の表情を豊かなものになっている。

室内を覗いてみると、常に順光で見る外部の緑を感じることができるとも気持ちの良いオフィス空間である。床から天井までのガラスカーテンウォール面に木製のカウンター席を設置し外部を感じながら、様々なワークスタイルにも対応できるようになっている。また、その木製カウンターがさりげなくカーテンウォールの荷重を支えている。この場所で働くワーカーやゲストにストレスを感じさせない伸びやかな空間である。この空間を創り出しているさりげないディテールも緻密によく考えられている。階段室の黒色に塗装された厚手の鋼板で作られたとてもシンプルな手すり壁が、一枚の繋がった板のように見え上下階をつないでいる。この階段室にもカーテンウォールから燦爛と光が入り込み、この手すり壁をあたたかも彫刻のようにも見せている。内外共にとても気持ちの良い空間が創られている。優秀賞に相応しい作品である。 [選考委員:東條隆郎]



低層階テラス：首都高速道路と同じレベルにショールームの展示スペースを計画

写真撮影:Nacasa&Partners



オフィス内観：重なり合う軸をインテリアに引き込むことで、外部を感じることのできるオフィス空間

写真撮影:井上登



北側外観：周辺環境の魅力を場所ごとに取り込めるように立体的に積層したボリューム

写真撮影:井上登

「積層」から「彫刻」へ
—アフターコロナの都心のオフィスを再考する—

アフターコロナにおいて、経済活動を担うオフィスの在り方が問われている。空調、照明、エレベーターという設備的な発明により、オフィスは外部環境と関わりなく拡大、積層することが可能になったが、それにより、内外の関係性が希薄になることも多かった。一方で、アフターコロナの現在、リモートワークとの併

用も可能になり、リアルな場の価値がこれまで以上に問われている。その場でしか体験できない価値。周囲の環境を丁寧に読み解き、「身体的・物質的」にตอบสนองするオフィス。内外の関係を立体的に構築し、場所ごとに異なる魅力を持つ。「積層」から「彫刻」へ。場所ごと特性は、アクティビティを誘発し、ユーザーが工夫をしながら使いこなすことができる。ユニバーサルスペースとは異なる不均質なフレキシビリティは、人と場所の能動的な関係を生み出す。

[応募番号:12]
所在地:東京都港区芝
主要用途:事務所、ショールーム
敷地面積:1,436.75㎡
延床面積:8,648.46㎡

「お宿 Onn 中津川」

作者：意匠設計：株式会社 成瀬・猪熊建築設計事務所 猪熊純 成瀬友梨 長谷川駿 日和拓郎 ヘ・ジンヒ/
構造設計：株式会社 木講堂 渡邊須美樹 伊藤次郎/設備設計：株式会社 環境エンジニアリング 成田賛久 増川智聡

デザイナーが手掛ける宿泊施設では、そこで提供される顧客体験やサービスのグレードと価格帯との関係を、コストを勘案しつつ最適化することが最も難しい。さらに、地理的立地や宿泊の目的、ターゲットとするゲストの属性が異なればなおさらである。その点において、この作品では絶妙のバランスが高い次元で達成されているように思える。岐阜県中津川市という立地、主要鉄道駅からやや離れたロケーション、ビジネス利用とツーリズム利用の混在、狭隘な前面道路などの条件下にあっても、驚くほど豊かな空間が用意されていた。

全ての共用部が集約された1階では、旧中山道の街路からセットバックした広場を経て、玄関からレセプション、ラウンジ、ダイニング、大浴場に至るまでの空間が、微妙な床レベルの切り替えによって分節されている。ひと続きの空間の中に、多様な場の様相が紡ぎ出され、木曾ヒノキの内装と格天井、足裏の感覚に訴求するなぐり加工のフローリングがそれらをつなぎ合わせていた。広場に面するダイニングは、大きな開口とその先の縁

側を介して街並みへと展開する。

一方、2階以上の客室階では、効率的な部屋割りを踏襲しつつも、ビジネスホテルではまずお目にかかれない設えが目をついた。エレベーターホールの天井を折り上げ、その高さの中で垂直、水平の構造材をそれぞれ耐火木と耐火塗料を組み合わせられて被覆することで、意外性のある造形が生まれる。雁行する中廊下のアプローチと共に客室に至る空間体験に記憶に残るインパクトをもたらしていた。

この地域で長く材木業を中心に様々な事業を営んできた施主が、地域再生の旗印に掲げたプロジェクトの一つだということである。であるからこそ、競合する事業と差別化をはかるための方途を、デザインのクオリティに見いだそうとした決断は賞賛に値する。このクラスの宿泊施設に、建築家に関わることの意味と価値が、濃密に凝縮された作品である。

[選考委員：宮城俊作]



靴を脱ぎ、なぐり加工の床を素足で歩く、旅館のようなしつらえのエントランス



縁側で外と繋がるカフェラウンジ。エントランスから連なる格天井が場を作る



前面に広場を取り、ファサードを分節することで街のスケールと調和させている

このホテルは、木材関係事業を展開する地元企業が、地域を盛り上げるべく計画した建築である。中津川市は観光に特化するほどの観光地の集積はない一方で、工業が産業・雇用を支えている典型的な地方都市だ。これに対し私たちは、ビジネス客と観光客の双方をターゲットとし、滞在の質は旅館的、規模はビジネスホテル的、意匠は和風や伝統建築を意識しすぎず、丹念に地域性を織り込むことで、地域ならではの建築を作ることにした。配置は、前

面の旧中山道に対してイベント利用の広場を確保するとともに、恵那山の裾野である立地を建築に取り込み、1Fの床を奥ほどレベルが上がる構成とした。内装は、クライアントが製材し、東濃地区を中心とした工場や職人が作ったヒノキの要素を散りばめ、ホテルが地域の木材関連産業のネットワークを束ねるハブになっている。竣工から一年、現在では付近の飲食店が当日に予約が取れないほど街に人が来るようになっている。

[応募番号：48]
所在地：岐阜県中津川市新町
主要用途：ホテル
敷地面積：1,027.69㎡
延床面積：2,751.07㎡

「聖林寺観音堂」

作者：北川・上田総合計画株式会社 代表取締役 北川典義 / 北川・上田総合計画株式会社 取締役 上田一樹

この十一面観音像は西暦760年頃造られたもので、奈良県の南西部、桜井市にある大神神社の神宮寺であった大御輪寺に安置されていたものである。秘仏として一般の目には触れることは少なかったという。明治維新の後「神仏分離令」が出され、廃仏毀釈の対象となる危機にあったが、その前にこの聖林寺に預けられ、事なきをえた。また明治中期には東京芸術学校の設立に貢献した米人のアーネスト・フェノロサが岡倉天心と共にこの観音像を見出しその価値を世に知らしめ、初めての国宝となったのである。

昭和34年にこの観音像を収蔵するため建てられたコンクリート造の収蔵庫に、地震災害から国宝を守るため、大幅な改修が必要となったのがこのプロジェクトの始まりだった。これを機に、像を守るための収蔵庫を、祈りの空間として生まれ変わらせたいという要望に対して作者は、創建当時の空間構成に倣って、収蔵庫の外に外陣となる前室を新たに増築、収蔵庫の部分を内陣としての空間に設えた。外陣と内陣は階段によって

仕切られ外陣から観音像を仰ぎ見るレベル差を作り、使われている吉野杉も色を分けるなどしたことで、内陣の空間がより荘厳に感じられる。

内陣の中で最も心を打つのが、観音の頭上にある明るい宇宙を思わせる真っ白な天蓋である。材質感をなくした白い背景は奥行きが無限に感じられ、観音が無上の存在であることを示しているようである。また国宝として課せられた厳しい条件から一定の空気の条件を満たすべく独立した免震ガラスケースには多くの照明の光が反射しないよう様々な工夫が凝らされていた。またこのケースのおかげで通常の仏像ではありえないような四方からの、また直近からの拝観を可能した。普通はあまりない、色々な照明が用いられているがこの空間にいてもほとんどその存在を感じることはない。しかしそのおかげで明るい中で拝観する観音の美しさは一際のものである。この作品のあちらこちらに作者のこだわりの表現があふれていて、来てよかったと思わせてくれた。 [選考委員：可児才介]



前室から仏を仰ぎ見る関係は、観音像が奈良時代に安置されていた堂を再現したもの

写真撮影：松村芳治



既存収蔵庫の屋根は、瓦葺から経年変化の美しいチタン亜鉛合金葺きに改修

写真撮影：松村芳治



半球天井の「天蓋」「光背」で観音像と参拝者を包む「人と仏が共にある“現代の仏堂”」

写真撮影：松村芳治

奈良時代の十一面観音菩薩立像(国宝)を安置する収蔵庫です。かつて大神神社の神宮寺である大御輪寺の本尊として祀られていましたが明治元年の神仏分離令の際、聖林寺に移されました。観音堂は文化財保存のための「収蔵庫」である一方、信仰の対象としての観音像と向き合う「祈りの空間」です。我々は創建当初の「双堂形式」の祈りの空間に倣い、収蔵庫を内陣、前室を外陣と位置づけ、参拝者が外陣から内陣の観音像を仰ぐように計画していま

す。外陣からはちょうど観音像と視線が合う関係となります。内陣には宇宙を象徴する半球の天蓋を計画し、その中心に観音像が安置されることで、仏の慈愛があまねく世界に届けられるよう意図しています。また天蓋を少し傾けることにより、外陣からは観音像の光背を想起させる構成としています。「硝子の御厨子」と名付けた独立免震展示ケースにより、これまで見ることのできなかった四周からの拝観が可能となりました。

[応募番号：20]
所在地：奈良県桜井市
主要用途：寺院
敷地面積：4,319.98㎡
延床面積：90.98㎡

「tobe」

作者:kufu 成田和弘 / kufu 成田麻依

広島市内の住宅街にある既存の3階建のアパートを、L型に囲んで増築された細長い住宅である。周囲には、狭いわりには地域の人の生活動線として常に人通りのある小道が走る。既存と増築の間の境界は薄いカーテン一枚。既存アパート側の全ての出入口を掃き出し窓にすることで、別棟でありながら、既存アパートに住む高齢になった祖母を見守ることができる。

施主は、祖母と距離感のある空間であること、個人収集したartと暮らす生活空間であること、将来artを外部の人にも開放することを想定した空間であることを希望した。細長い敷地であることから、周囲の小道に圧迫感を与えないよう、形や天井高の違う部屋を横に繋ぎ、建物の外殻を各部屋ごとのスケールに落とし込んだ建物とした。靴の部屋、エントランス、天井の高い居間、小さい書斎、台所、クローゼット、子供部屋、収納部屋、トイレ・洗面・風呂の部屋と、生活に必要な各部屋を自然光の入り方や

明るさの異なる部屋にデザインした。各部屋の外壁は、内外ともにギャラリーのアイコンとして、カジュアルでクラシカルな赤茶色のブリックタイルを使い、アパートが立ち並ぶ住宅街の中で落ち着いたたたずまいを醸し出している。

各部屋のユニットスケールが小さいので周囲の小道にも馴染む。夜は部屋から漏れた明かりが暗い小道を照らす。更に部屋の中に隙間を設けることで、部屋の中からは自然の変化を感じ取ることができ、外部の小道を散歩する近所の人は、部屋の中のartや隙間に整えられた坪庭を楽しむことができる。

特筆すべき点は、既存アパートと増築住宅のすき間にぐるりと設けられた、高さ30cmのデッキが果たした役割である。このデッキが、おばあちゃんとひ孫のふれあいの場に留まらず、日常的なおしゃべりの場となり、近所の人たちの生活を豊かにした点を高く評価したい。[選考委員:近田玲子]



小道に対して設けた建物の隙間や開口部により垣間見えるartや住人の気配が街の交流を生み出す

写真撮影:藤井浩司



部屋毎に分節した建物を施主の祖母が住むアパートを包むように置くことで街と多孔質に繋がる境界になる

写真撮影:藤井浩司



各部屋は生活の場とギャラリーを切り離さず一体化し展示されたartとともに暮らす空間としている

写真撮影:藤井浩司

16 本作は施主が個人で収集したartとともに生きるギャラリー住宅である。条件として施主の祖母が所有し生活する既存アパートに対して一緒に暮らすことが要望としてあった。計画は既存建物を抱え込むように建物を新築し、既存側に対して全面掃き出し窓とすることで、既存と新築の間にある内外の境界を曖昧にし、別棟でありながら同居を実現させている。建物のどこからも祖母を見守ることができ、反対に祖母もどこからでも入れ

る、薄いカーテン一枚の距離感とした。また周囲にある小道に対して、圧迫感を与えないように建物の外殻を各部屋ごとのスケールまで落とし込んだ。更に部屋の中に隙間を設けることで視線の抜けと街に対してartを開くような余白を設けた。この余白をキッカケに街の中でコミュニケーションが生まれるという場面に何回も遭遇する。この建築を舞台に、これから起こるすべての現象がartになる生き方が街に対しても見え隠れし始める。

[応募番号:46]
所在地:広島県広島市
主要用途:専用住宅兼ギャラリー
敷地面積:189.52㎡
延床面積:128.19㎡

第33回 AACA賞 奨励賞

「清水建設北陸支店新社屋」

作者:清水建設株式会社 プロジェクト設計部2部 岡崎真也/清水建設株式会社 関西支店 副支店長 堀部孝一

この計画は北陸に100年の歴史を持つ支店の新社屋である。シンメトリで幾何学的外観の建築は、正面に広場を設け、既存の神社や緑を残し、藩政時代の面影が残る風格ある街並みの雰囲気 наследしている。この建築は「超環境型オフィス」として最先端の技術力で、働く人のための気持ちの良い空間の実現を目指している。構造は外観を構成するRCの壁柱とフラットスラブ、そして内部は、キャンティレバーとランダムな鋼製柱で変化のある吹き抜けの大空間に心地良い居場所を作り出している。大空間は「木鋼ハイブリッド」という梁成1000mmのビルトHの鋼製梁を1時間の耐火被覆の能登ヒバで覆った格天井で覆われる。これは空間全体を全館避難安全検証により大臣認定を受けたことで内装制限がなく、薬剤の不燃処理も不要になったことで、人間の五感を開放する「能登ヒバの風合いや香りのする大空間」が実現していることは素晴らしい。格

子天井の上部トップライトから降り注ぐ光と、南面のクライマー式ブラインドと庇の組み合わせ、そして西面の「木虫籠」から引用した縦ルーバーにより多様にコントロールされた床から天井までのLow-E複層ガラスの大開口により、太陽光の変化が室内に豊かに取り込まれている。トップライトの斜め屋根を利用した太陽光発電は冬期の不安定な天候を考慮した「Hydro Q-BIC」の水素によるエネルギーロスのないシステムとなっている。大型ガラス下部の換気、「躯体蓄熱型放射空調」、働く人のための照度と色温度を考えた照明システム。「ゼロシュリンク(無収縮)」コンクリートの床など、緻密な美術工芸品のような技術の集大成であるが、なにより働く人にとって心地よい場所を作ることを最終目的としている建築でありAACA賞奨励賞に相応しい優れた作品である。[選考委員:堀越英嗣]



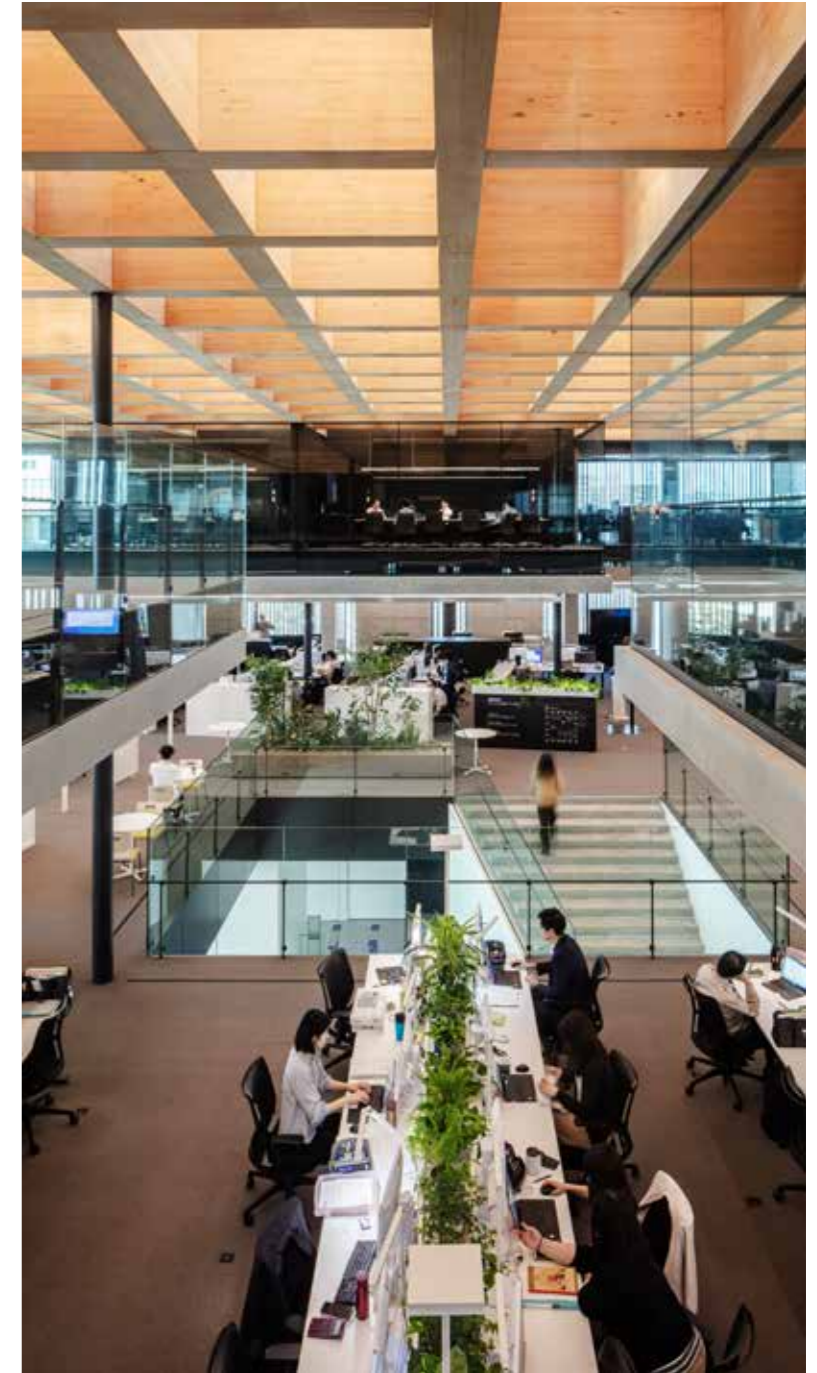
現代に相応しいかたちで具現化した木虫籠ルーバーが繊細な陰影をつくる

写真撮影:新建築社写真部



低層の社屋は周辺の密度感と調和し深い陰影が伝統的街並みと呼応する

写真撮影:北嶋俊治



2・3階オフィスには能登ヒバの格天井から採り入れた自然光が柔らかく広がる

写真撮影:高橋菜生

石川県金沢市における清水建設北陸支店の社屋建て替えである。敷地周辺には藩政時代の面影を感じる美しい街並みが残る。計画にあたっては、この場所で100年営んできた歴史・周辺環境とのつながりを大切にしながら、国内最高クラスの環境性能をもつオフィスを目指した。県産の能登ヒバによる木質化、日射量の季節変動が大きい北陸でも年単位のピークシフトが可能な水素エネルギー利用システムの導入など、この場所固有のかたちで具現化し

た技術を丁寧に統合し、その取組を広く発信する媒体としての建築を実現した。

[応募番号:3]
所在地:石川県金沢市玉川町
主要用途:事務所
敷地面積:3,255.01㎡
延床面積:4,224.46㎡

「末富 青久 カフェスタンド」

作者: 田中亮平 G ARCHITECTS STUDIO / 北川一成 GRAPH株式会社

「AoQ カフェ」は、2023年5月にオープンした京都四条と五条の間、烏丸通り沿いの交差点に建つ、テイクアウト専門の奥行1mの小さなカフェスタンドである。裏千家から絶大な信頼をよせられ、主要なお茶席のお菓子を一手に手がけている京都の老舗和菓子屋「末富」が、「洋菓子×和菓子」の新しいお菓子を販売する新規事業のアイコンとして建築化した。カフェスタンドの先には末富本店があり、このささやかな店が本店へのゲートウェイの役割も担っている。そこで、大通りに面した幅1mの壁面を茶色から水色に徐々に変化させて存在感を強く印象づけ、人々の視線をカフェスタンドの奥にある末富本店に誘導するようにしている。前面道路に並行して細長く配置された厨房と休憩スペースの外観は、古都京都の老舗和菓子屋にふさわしい茶色とし、休憩スペースは「末富」のコーポレートカラーである水色で表現した。自然素材と見なされた幅3センチ足らずの銅箔テープを、隙間なくパネルに貼り付けた後、銅箔の上に醤油を塗

って茶色に、塩化アンモニウム水溶液を塗って緑青色に変化させ、京都の景観条例を満たして茶色と鮮やかな水色を得た。全て手作業で貼り合わされたテープのライン、パネルごとにできたわずかな色むらも、工業製品にはない豊かな表情を作り出している。休憩スペースのベンチの下にひっそりと造られたミニチュア枯山水庭園は、狭い休憩スペースを広く感じさせる役目を果たすと同時に、老舗の矜持を示している。閉店時間になるとここには網状の幕が下され、天井から床に移されたランプが水色の休憩スペースを終夜照らす。あん(甘い)×生ハム(しょっぱい)を組み合わせた「生ハムとチーズのあんカスクート」「あん入りカフェオレ」を食べて、伝統を守りながら今の時代に沿ったものを作って若い人に和菓子の奥深さを知ってもらいたいと願う施主の思いをかみしめた。 [選考委員:近田玲子]



建物を大通り、烏丸通りから見る

写真撮影: 志摩大輔



建物を長手から見る。右にテイクアウトカウンター、左に緑青の壁のイトトイン

写真撮影: 志摩大輔



建物越しに交差点を見返す

写真撮影: 志摩大輔

裏千家から絶大な信頼を寄せられ主要なお茶席のお菓子を一手に手がけている京都の老舗和菓子屋「末富」が手掛ける新ブランド「末富 青久」のテイクアウト専門のカフェスタンド。敷地は四条と五条の間の烏丸通り沿いの交差点。木造二階建てのさらに下屋部分でした。奥行はたったの1m。厨房と休憩所を道路に並行配置したプランは直ぐに決まりました。我々は景観に配慮して外壁に銅箔テープを貼付け醤油と薬剤を使い分け銅を酸化させました。外

観を古都に相応しい佇まいとつつ「末富ブルー」と呼ばれ70年以上も親しまれている美しい水色を銅の錆ある緑青で表現しました。AACA賞は建築のみならず、建築の各専門家の方々をはじめ彫刻・照明・家具・ランドスケープまで幅広い領域の審査員の方々为名を連ねてらっしゃいます。今回、応募した物件は奥行1mほどの本当に小さな物件です。しかし多方面の領域にも応えられる様な工夫を散りばめた渾身の作です。特に銅の酸化をコントロールした外

壁はぜひ直接ご説明したいと思い、現地審査のあるこの賞の応募を決めました。

[応募番号:50]
所在地:京都府京都市下京区
松原通室町東入玉津島町
主要用途:物販店
敷地面積:10.17㎡
延床面積:10.17㎡

「熱田神宮 剣の宝庫草薙館 くさなぎ広場」

作者：上田徹 / 玄総合設計

廠かで美しい刀や太刀を学ぶための、新しい可能性を体感した空間であった。

愛知県名古屋市の熱田神宮は、熱田大明神を祀神とし1900年の歴史を背景に人々の熱い信仰を古くから集めてきた。今回の対象は、西門近くに配置された「剣の宝庫 草薙館」(以下「草薙館」という。)と前庭「くさなぎ広場」。江戸期には伊勢湾に接し湊として栄えていたことにちなみ、船の抽象オブジェを中核にした池と休憩所が計画された。その賑わいから「草薙館」に一步足を踏み入ると、天井へと延びる“ぐねり”とした印象の構造体がつくる、深い森林のような静寂な空間が広がり、弧を描く壁際から突き出した展示ケースに、刀剣が凜として並んでいた。この熱田神宮には、三種の神器の一つでもある「草薙の剣」が祀られ、奉納された450口の刀剣が宝物館に収蔵されている。「草薙館」はその刀剣を展示し、さらに日本古来のたたら製鉄から製造についても取り上げ、刀に関する貴重な体験と学習のできる機能をも備えた施設として計画された。大きく見上げる先には天窗が4つ。外光とともに神宮の杜が、鏡面仕上げの天井

に映し出され、饒舌な仕様とは真逆に、緑に包まれたような不思議な安堵感を覚えた。

特筆されるべきは、刀剣の展示である。通常、刀は、ケース内正面から対峙しての鑑賞となるのだが、「草薙館」では刀の3方向からの鑑賞を可能とすべく、特別のケースが設計された。刀の切先(きっさき)を視ることが許されるそのケースは、壁から斜めにせり出し、一口ごとに集中して観賞することができる。展示替えも、学芸員が安全を確保しながらスムーズに行えるような開閉の工夫が凝らされている。そして、刀を照らす照明が、しめ縄型のカバーに収められ器具が目に入らないようになっており、細かい調整により一口ごとを最適に照らせる照明計画も評価したい。

こうした独特の展示空間は、設計にあたった上田徹氏が、これまで長年にわたり熱田神宮の配置改造を伴う設計に関わり、深い信頼関係を結んでいる中で成就できた建築空間といえよう。刀剣を展示する施設とその環境において、見るだけでなく体験を重視したあらたな刀剣の学び舎としての機能にも期待をしたい。

[選考委員：降旗千賀子]



新三面硝子ケースで宝刀公開。鏡効果で外環境遮断室内に、人は神苑の杜の内気を感じず

写真撮影：エスエス名古屋支店



熱田大神の杜と海の神が出逢う処がかつての熱田湊。今それを形で見せるくさなぎ広場

写真撮影：エスエス名古屋支店



広場に面した古代多々羅製鉄作刀工房を想う。唐破風玄関と右の石組みは作刀剣鍛錬場

写真撮影：エスエス名古屋支店

幻古代作刀工房を想う。皇位継承の三種の神器「草薙神剣」を祀る熱田神宮には古より刀剣奉納が続き、刀剣収蔵日本一の450口。毎月宝刀10口づつ、神苑に抱かれ拝観させ「草薙神剣の心と刀剣鍛造を実感できる類なき建築を」との熱田神宮の崇高な依頼。設計当初より太郎太刀武者像実物大制作とか、提案空間と人の様を多数水彩画で示し、熱田神宮の想いを確認。耐火無窓の箱の内で、と国宝等文化財を護る国の展示指針とも調整。外部

環境から遮断され、硝子ケース(独自270度で房形外照式)内に自ら光を放つかの宝刀。なのに対峙する人は、杜の霊気と風の梵も感じる。5箇所の北向鉛直高窓の外の杜の巨樹を、万華鏡効果で鏡天井一杯に杜の姿を増幅。館周囲の南神池水面も拡張し、東海道一の歴史「熱田湊」をテーマに、渡し船オブジェと苔生し屋根の待合東屋群、湖岸できめん楽しむ熱田家族ベンチも新案。全て世代、早朝から夜まで、賑わいある「くさなぎ広場」

[応募番号：2]
所在地：愛知県名古屋市熱田区神宮
主要用途：神社
敷地面積：187,707.00㎡
延床面積：1,053.40㎡

第33回AACA賞 入選

「Slit Park YURAKUCHO」

作者:株式会社三菱地所設計 佐藤琢也
 荒井拓州 植田恭子/株式会社オープン・エー
 馬場正尊 大橋一隆/TAAO 會田倫久/
 東邦レオ株式会社 小林まき子 原田宏美
 所在地:東京都千代田区丸の内
 応募番号:34



「VOXEL APARTMENT」

作者:藤村龍至 RFA主宰
 所在地:広島県広島市
 応募番号:43



写真撮影:Photo Kenta Hasegawa

応募作品一覧

応募番号:4



「斜と構」

作者:加藤大作 UND一級建築士事務所
 所在地:東京都墨田区東向島

応募番号:5



「エスコンフィールド HOKKAIDO」

作者:株式会社大林組 設計本部 課長 海老原浩雄/
 副課長 伊藤昇/副課長 國松英彦/
 主任 塩田一弥/主任 王琳
 所在地:北海道北広島市Fビレッジ

応募番号:6



「御嶽山ビジターセンター やまテラス王滝」

作者:平瀬有人 平瀬祐子 株式会社 yHa architects
 所在地:長野県木曾郡王滝村田の原
 写真撮影:TakeishiYAMAGISHI

応募番号:7



「山手の家」

作者:株式会社後藤周平建築設計事務所
 後藤周平
 所在地:静岡県浜松市中区山手町
 写真撮影:長谷川健太

応募番号:8



「博多 FD ビジネスセンター」

作者:清水建設株式会社一級建築士事務所
 業務施設設計部 グループ長 東田淳行/清水建設株式会社九州支店一級建築士事務所
 設計長 登坂壮人/シュミット・ハマー・ラッセン・アーキテクト 勝目雅裕
 所在地:福岡県福岡市博多区網場町
 写真撮影:有限会社フォワード 楠瀬友将

応募番号:9



「Hair room TOARU」

作者:関口貴人建築設計事務所 代表 関口貴人
 所在地:埼玉県飯能市双柳

応募番号:10



「石見銀山まちを楽しくするライブラリー」

作者:平井俊旭 島根県立大学 地域政策学部
 地域づくりコース 講師
 所在地:島根県大田市大森町

応募番号:11



「NAOTO FUKASAWA ATELIER」

作者:深澤直人 荒井心平 NAOTO FUKASAWA DESIGN/
 江湖猛敏 藤晴香 株式会社 竹中工務店
 写真撮影:SS Co., Ltd. Shimao Nozomu

応募番号:13



「丘の上のグループホーム」

作者:株式会社 SOGO 建築設計 十河彰十河麻美
 所在地:東京都八王子市
 写真撮影:SOGO AUD